

菊池短歌会

1月詠草

朝風の海に日が射し煌めきて鬱金の微塵円く広がる
われ白寿、娘は古希の屠蘇を酌むすこやかなるに
心足らへり
氏岡 百枝
近き身内に病む人ありてあらとしの初詣でさえた
めらひにけり
梅野カヲル
黒き実をひと日ですべて食はれたり椋鳥の奴めた
だではおかぬぞ
古賀 勝士
八十の端は捨てて新春の瑞光拝めばただに眩しも
中川 愛子
元朝の国旗巻きあげ吹雪くる厳しき年か平成二十年
中原ちえ子
霜月のあえかな草や思ふときかの古寺の柱恋しも
怒留湯たけよ
矢筈嶺は雪か霰か、歳末の街を脚場に太き虹立つ
村上 咲江
春魁け芽吹き初めたる冬牛蒡寒さに勢ふ双葉が見
ゆる
山下 菊代
新らしき手帳に予定書き込めばまだまだ元氣と行
くえふくらむ
余語やす子



万句の里俳句会

1月句会

冬耕の一人黙々裏返す
母のこと遙かな思ひたまご酒
托鉢の僧の足より風凍る
高木 幸子
渾身の力眼にあり弓始
田中ひさ子
薄き日に下枝ゆらし笹子なく
東 鈴子
蠟梅の香り風呼ぶ里の村
稲田 鈴子
八人が揃ひ和やか雑煮食ぶ
梅田 昭子
御降りや明けの川波きらめかす
光本とよいち
水仙の香れば空の澄む青さ
小山 照子
雪嶺に一朵の雲の翳りけり
田中 美智
参詣のつらつら続く梅の宮
吉井 綾子
角砂糖も一つ入れて冬籠り

肥後狂句桜会

例会入選句集より

春が来た 生き返つとる観光地
小川 繁美
何でだろ 海図も持たず戻る鮭
狩野 本六
春が来た 散歩も楽になりました
須藤 新生
春が来た 女は男狂わする
高倉 新米
何でだろ 本読みだすと眠くなる
光堀 善教
よからだい 酒一杯アは葉たい
田中 孝幸
ポーツとして 脳味噌は春休みちゆう
東 栄次

泗水短歌会

1月詠草

春が来た 媽がそろそろ動きだす
荒木 玄海
何でだろ 美人ばつてん縁の無ア
窪田 明德
春が来た さあ呑まるるぞ呑まるるぞ
田尻 浩風
ポーツとして 時代の波に乗りそこね
北村 竹刀
春が来た 何処へ行かすか留守ばかり
藤野 清子
歳晩に千両赤実七軒に正月花とて配り満ちたり
内田つね代
元朝に初雪ちらら舞い下りぬ佳きこと清しと春待
ち仰ぐ
高藤タツノ
寒の朝部屋の一面陽の射せり自然の恵みに暖房い
らず
中山 定子
一点の曇り残さず窓を拭く光求めんと晦の昼を
長尾はるみ
濁りたる去年の世相流すがに雪は降るふる子年元
旦
平嶋きくえ
冷え込みし朝のひととき庭歩く真冬の入り口雪ま
だ積まず
宮本 峯子
三年の日記を買へば来る年の気構へやも湧きて
来たりぬ
増田久美子
年一度賀状ひとつを縁とし今年三葉届かざりけ
り
大島 ひと
パタパタと乾ける音を降らせつつ自衛隊機一機朝
空よぎる
吉安 永子

せせらぎ俳句会

新年句会

羽根つきも凧上げも見ず松七日
五丁 義昭
満百歳迎ふる年の明けにけり
坂本まつえ
戦も老の兆しと労りて
内村 泊虹
炬の前に足袋纏々老の三日かな
村山 数恵
枯菊を刈れば香りのひとしきり
藤本アツ子
餅花を小枝に飾り小正月
寺本 和子
持ち越しの疲れ誇る初湯かな
藤本 邦治
白粥に添えし七草の香りかな
服部 静子
年明けても寒さはまだまだ変らない
(中二) 渡辺 大寿

肥後狂句水笑会

1月例会

今年こそ 病院と縁切らにやんが
井手 水光
初詣で 欠席届出しとった
清原 英坊
初詣で どしこ頼むとよかつかい
宮上 美由
作り過ぎ パフォーマンスの多すぎる
吉岡 三水
覗き込み カルテにや何て書かすどか
神尾 凡骨
初詣で がんぎ昇つてばかう息
御手洗三代
初詣で 下で拝んでうつつちよう
中島 五女
赤信号 もう飲むなてち睨む娘
続 義昭
覗き込み 匂いばかりじゃわかりやせん
柏原 乗願

七城短歌会

1月詠草

ひと冬を次なる蕾に継ぎつづく宿命のパンジーひと
花萎れる
岩崎 照代
初打ちのグラウンドゴルフに向かう朝クラブを杖
に坂道のぼる
岩津 涼子
新年の挨拶なせる孫三人強請りのポーズで正座崩
さぬ
佐々 重弘
金婚の旅先ガイドの弁まことみちのく古寺が除夜
の鐘告ぐ
緒方 寛子
屈まりて七草田畦に摘みおれば折々吹ける風の冷
たし
高木 精
静かなる元朝に舞うボタ雪に「ヤッター ヤッ
ター」と孫がはしゃぐも
森 道子
寒風に襟立て行けばパンジーの花満開に背筋伸ば
さる
吉岡 充子
七度目の干支に遇う身を鞭打ちて施設のプランに
応えてゆかむ
堀 甲子
冬枯れのさ庭に朝の日が射して黄金に光る玉実の
きんかん
池田カツ子
無理祟り入院三日目昼近く反省促す雪降りしきる
斉藤 芳子

旭志文芸俳句会

1月詠草

縄跳びの子等に短かし冬日かな
中尾ヨシコ
座敷まで日射し通りて白障子
芹川のり子
居ながらに英彦山紅葉を裏表
芹川 蓉子
木枯やくほみに孕み牛寝たり
水谷 ミネ
茶の花や老も寒波に立向ふ
出田みどり
野菜畑春草のみが緑濃し
郷 ミヤ子
一筆を書き添え賀状書き終る
東 芳子